



繋がり

そして君は、左の頬にキスをした。

樹は絵画鑑賞を好み、自分で描くことはしなかったが、展覧会のために田舎から日帰りで東京まで足を運んで、美術館をハシゴする事もよくあった。また欧州への憧れ、特に英国への感心が強く、向こうに移住したいと本気で考えていた時期もあった。外国語は一切話せないのだけれど。

中学校の卒業論文では、19世紀末の切り裂きジャック事件について写真入りの文章をまとめ、周囲から奇妙な目を向けられたこともあった。友達はみな、ディズニーやらジブリやらコンビニについてやら、なんとも子ども心溢れる題材を選んでいた。

樹は、いわゆる凶悪犯罪のそのバックグラウンドに興味を惹かれる傾向があった。時には狂気へと移り変わりうる、人間の心理や倫理といった、言葉では表しきれないものたちに。

樹はまた、本が好きだ。本を読むこと、というよりもむしろ、人間の思想や感情・理屈が表されている、文章や図書という情報媒体そのものが好きなのだ。だから本屋でバイトもしている。それは好きなものに囲まれた、至福の一時といえる。

東京駅は、人間観察をするにはもってこいの場所かもしれない。改札やホーム目掛け、ただひたすらに歩を進める人々。子どもと荷物に両手を塞がれ、慌ただしく通り過ぎる母親。そして辺りを見渡し、待ち合わせの相手を探す女性。けれど、それらの光景をしばらく目で追っていると、視覚的感覚がおかしくなっていく気になる。いわゆる人酔いだろう。

『東京には何も無いよ。ただ人がたくさんいるだけ。』

信がいつか、樹に言った。

東京には美術館がたくさんある。田舎まで巡回されない展覧会が多く開催されていることへの羨ましさに、この都会に対する憧れを口にした時のことだ。

なるほど、確かにそうかもしれない。そこにただ、人が群がっているだけともいえる。この言葉がふと思い出された頃、樹の携帯の着信音が鳴った。信からのメールだ。

『ごめん、電車乗り間違えたから少し遅れる。』

信が待ち合わせの時間に遅れるのは初めての事だった。彼は早めに集合場所へ行き、相手がきょろきょろと自分を探す姿を見るのが好きらしい。

『了解。気をつけて来てね。』

一泊分にしては大きめの荷物を抱え、この人混みの中を立ち尽くすのは少し無理がある。樹は待合室で時間を潰すことにした。運よく椅子が一つ空いている。その狭いスペースに腰掛け、老若男女が各々も一時を楽しんでいる様子を横目に、樹はひとり小さくため息をついた。

『着いたよ。新幹線の改札を出てすぐの、案内所のところにいるから。』

10分程して、携帯が鳴った。

『はい、今からいくね。』

そう返信したものの、なかなか目的の場所へは辿り着けない。いつ来てもこうだ。ウロウロ歩き回って迷子になる前に、と、信に電話をかけた。

「ごめん、やっぱりよく分からない。ここどこだろ...。」

「改札は出たんだよね?」

「うん。出たけど案内所が見当たらない。」

「分かった、そこにいて。おれが見つかるから。」

電話を切って間もなく、リュックを背負った背の高い男性がひとり、真っ直ぐ樹に近づいて来た。

「久しぶり。」

二人が顔を合わせるのは半年ぶりだった。

「元気？」

「うん、まあまあ。信は？」

「まあまあ。」

この何気ない、かつ力が入っていないようなやり取りが樹は気に入っていた。特に取り繕う事もなく、それでいてちゃんとお互いの存在を認め合っているような、そんな気がしていた。

「じゃあ、行こうか。」

信はさり気なく樹のカバンを肩にかけ、一歩前を歩いて行く。そうだ。樹にとって心地良い、この距離感が懐かしく感じた。